

「心ときめきす」小考

——枕草子二九段の一解釈——

木 越 隆

枕草子の第二九段（日本古典文学大系「枕草子」八以下「大系」という√の段分けによる。以下同じ）に

心ときめきするもの①雀の子飼ひ。②ちご遊ばする所の前わたる。③よきたき物たきてひとり臥したる。④唐鏡のすこし暗き見たる。⑤よぎ男の車とどめて、案内し問はせたる。⑥かしら洗ひ化粧して、かうばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人なき所にて、心のうちには、なほいとをかし。⑦待つ人などのある夜、雨の音、風の吹きゆるがすも、ふとおどろかる。（①～⑦の番号は筆者が付す。）

とある。いわゆる類聚、ものはづけの章段で「心ときめきするもの」を並べたわけであるが、この「心ときめきす」について、「大系」では次のように注しておられる。

胸がときめくことで、何かを予想し、期待するとき心

が自然に動く状態についていう。未知または未然の事態への予想なので、心の動揺はさげ得ないが、悪いことについては用いられない。その点「胸つぶる」の語と対照的である。

この注に従えば、右の「枕草子」の文でそれに適當するものとすぐに考えられるのは、⑤と⑦である。⑤は身分、教養が高く、また美男子である者が、自分の所へ来るのかと期待し、⑦も風や雨の音を待ち人（ここでは男）が訪れて来たのかと心ときめかすのである。また⑥も美しく化粧し、よい香りのする衣服をまとった女性が、このように自分分は美しく着かざったのだから、もしかしたら（よい男に関心を持たれるかも知れない）と期待するのは、現在、テレビのフォーマルなどで、某化粧品会社の製品を使ったり、某繊維会社の織物を着て「きょうは何かが起こりそう」と宣伝するのと同じ気持ちであろうということは理解

できる。しかし他の①④になると、必ずしも「大系」の注に、直ちに適應するとはいえないようである。

二

たとえば、①の「雀の子飼ひ」、②の「ちご遊ばする云々」について、塩田良平氏は「三巻本枕草子評釈」の鑑賞欄で「雛の飼育はむずかしい。育つかしら育つかしらとつねにハラハラするからであろう。幼児を遊ばしている前を通りすぎるのも、せつかく無心になっているものを、泣きはしないかと細かい心づかいがせられるからである」と述べておられる。塩田氏は「心ときめきす」を「胸がどきどきする、心がはずむもの」と注しておられるから、このような解釈もでてくるのであるが、これに似た解釈をする注釈書は多い。

しかし⑤・⑥・⑦が「大系」の注で解釈できる(塩田氏も「大系」とほぼ同じ解釈をしておられる)のに、それとむしろ反対の心配のために胸をさわがせるといふものが、同じ章段にはいるのはおかしい。なぜならば、「枕草子」の他の章段は、たとえば

峰は ゆづるの峰。あみだの峰。いやたかの峰(一五段)

原は みかの原。あしたの原。その原(一六段)

人にあなづらるるもの、築士のくづれ。あまり心よし(一

〓才人ヨシ)と人にしられぬる人(二七段)

つれづれなるもの所避りたる物思み。馬下りぬ(〓駒ノ進マナイ)双六。除目に司得ぬ家。雨うち降りたるはまいていみじうつれづれなり(二三九段)

のように、「〇〇は」というのに対して、異質のものがはいることは皆無といってよいからである。

だから、この「心ときめきするもの」の章段で、あるものは、心配で胸がドキドキするもの、あるものは、期待で胸がはずむものではおかしいのである。では「心ときめきす」とは、心配とか期待とかに関係なく、ただ胸がときめくことを言うのであろうか。

三

座右にある辞書で「心ときめき(す)」をみると

(1) 大日本国語辞典「心のときめくこと。」

(2) 大言海「②心サワギ。ココロバシリ。ムネバシリ。ムナサワギ。③急グコト。取りイソグコト。急遽。」④

①は筆者が付す)

(3) 三省堂明解国語辞典「胸がときめくこと。胸がドキドキすること。」

(4) 昇竜堂国語辞典「胸がどきどきする。」

(5) 角川書店古語辞典「胸がどきどきすること。気がせくこと。」

(6) 旺文社古語辞典「胸がどきどきすること。心がわくわくすること。」

(7) 森北出版古語辞典「胸がわくわくすること。胸がど

きどきすること。」

(8) 小学館新選古語辞典「①胸がどきどきすること。期待などで鼓動が早くなること。②心がいそぐこと。あわてること。」

(9) 大修館基本古語辞典「胸が期待ではずむこと。」とあり(8)の①、(9)の「期待で云々」という(「胸(心)がわくわくする」もそれと同類かも知れぬが)以外は、ほとんど同じように、「胸がどきどきすること」と前述の塩田氏の「心ときめきす」の注のような説明である。ただ、(2)の①と(8)の②または(5)に「急ぐこと、あわてること。気がせくこと」とあるのが特別な意味であるが。そして、これらの用例に用いられているのは次のようなものである。(辞書に引用されている以上に記載する)

(A) 宇津保物語「国譲」中

例の御服(「略式ノ喪服ハ平服との解もある」)をぞ君(「袖君」は着給へる。「かくうけたまはりましたかば、此の侍る人(「袖君」)にも重き御服をこそ着せ侍るべかりけれ。心ときめきのやうなれども」とて濃き鈍色の御衣一襲、黒つるばみの御小袿取り出でて、着せ奉り給へり。(2)の①・(8)の②)

(B) 同「楼上」下

御返「……(犬宮ハ)御琴はいとよく習はせ給ふにこそ侍れ……。」と聞えつ。宮(「女一宮」)見給ひていとう

れしとおぼさる。「あやしの心ときめきや」とて、(御返ヲ)うちおき給ひつ。(1)・(2)の①

(C) 源氏物語「藤裏葉」

わが宿の藤の色こきたそがれにたづねやは来ぬ春の名残を(「内大臣の歌」)

げにいとおもしろき枝につけ給へり。待ちつけ給へるも(夕霧ハ)心ときめきせられて、かしこまり(「オ礼」聞え給ふ。(2)の②)

(D) 同「推本」

宮(「八宮」)も「なほ(匂宮ニ返事ヲ)聞え給へ。わざと懸想だちてももてなさじ、なかなか心ときめきになりぬべし。」(1)

(E) 同「宿木」

「みづから」とさへ、(中君ガ)宣へるが珍らしく、うれしきに心ときめきもしぬべし。(2)の②、(8)の①

(F) 枕草子八段

また異事ことごともなし(「タイシタコトモナイ」)。ひと夜のこと言はむと心ときめきしつれど、(6)(9)

(G) 同八二段

「とくとく(「早く、早く」といふが(……)見れば、青き薄様にいと書き給へり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。蘭省花時錦帳下と書きて」

末はいかに、いかに」とあるを、(9)

(四) 堤中納言物語、貝合

例の声を出ださせて隨身に(和歌ヲ)うたはせ給ふ。
(……)とうたはせて、まことにしばし「内より人や」と心ときめきし給へど、さもあらねば、口惜しくて歩み過ぎたれば、(7)

このほか、徒然草八段の文を用例にしているのもあるが、時代的に隔たるので省略する。

四

さて、(A)の例は、実正が弟実忠の離れていった北の方を訪ねて、父の遺言を伝えるところである。北の方は「あなた(＝実正)が訪ねて来るのがわかっていたら、わが子の袖君に正式の喪服を着せておくべきだった」と言つて、その喪服を着せるところであるから、「心ときめきのやうなれども」を、「あわてているようだが」とか「いそいでいるようだが」という解釈で通る。しかし「心ときめきのやうなれども」(とて)を「着せ奉り給へり」にかかるとみないで、「着せ侍るべかりけれ」へ倒置的にかかるとみると、「何かあなたのおいでを待ちしていたようですが」となつて、「大系」のいうように期待していることを表わす意味になりはしないか。無理な解釈であるかも知れぬが、いづれにしても心配だとか、気がかりだという意味にはならないことに注意したい。

(B)の例は、女一宮(＝仲忠の妻で、犬宮の母)が、犬宮が琴をちゃんと習っているかと尋ねた手紙の返事に「御琴はいとよく云々」とあるの見て喜んで「あやしの心ときめきや」と言っているのだから、早くその琴が聞きたい。犬宮はどれくらい上手になっているだろう、という気持と解せる。そうすれば、期待を持つての気持を表現したものである。何故「大言海」が(B)の用例にしたか理解しにくい。
〔急いで聞きたい〕の意味にとつたのか。

(C)の例は、内大臣の歌の「我宿の……たづねやは来ぬ」というところに、夕霧に対して、自分の娘の雲井雁を妻として与えようという気持があるのだから、長年雲井雁を恋慕っていた夕霧が期待に胸をふくらませるのは当然である。

(D)の例は、八宮が中君に言うことばである。「懸想だつ」は思いを懸けるように言うこと。好色男の匂宮にはそっけなくお返事なさい。懸想めいた返事を出すと、かえつて相手が期待して気をもむことになりますよという意味であつて、「心ときめき」を期待をかけることと解せる。

(E)の例は、薫が八宮の追善供養を営んだことに対して、中君からお礼の手紙が来て、その中に「みづからも(お目に懸つてお礼を申し上げましょう)」とあるので、薫は会える喜びに胸をふくらませたのである。

(F)の例は、有名な大進生昌と清少納言とのやりとりの章

段である。「ひと夜のこと」とは、夜、生昌が清少納言と話をしようとして、女房の部屋にやって来たが、清少納言に追い返されたことをさす。あの夜のことをいったら、またとちめて笑ってやろうと「心ときめき」したのである。

(G)の例は、頭中将(藤原齊信)からの手紙の返事を早く使いの者が言うので、開けたら「蘭省云々」と書いてあって、どんな内容かと期待して胸をときめかすほどでもなかったというのである。

(H)の例は、蔵人の少将が散歩していると琴の音がする家があるので、そこで隨身は歌をうたわせて、だれか出てくるだろうかと、期待して待っているというのである。

以上のように、辞書の用例をみると、(8)の②、(9)に用いられた例は当然であるが、単に「胸がどきどきすること」などという意味の例とされたものも、すべて、「大系」の注のように、期待するとき心が動く状態と解することができる。(A)は少々はずれるかも知れぬが。特に、「枕草子」二五段の

(すさまじきもの)産養うぶやしなひ、うまものはなむけなどの使に

祿とらせぬ。(中略)思ひかけぬことに(祿ヲ)得たるをば、いとかひありと思ふべし。これはかならずさるべき(祿ヲ得ルハズノ)使と思ひ、心ときめきして行きたるは、ことにすさまじぞかし。

の「心ときめく」は明らかに、期待に胸をおどらせるとい

う意味である。

こうみると、前述の塩田氏の「心配でハラハラする」というような意味は不適當になる。

五

「心ときめき(す)」を期待で心が動く意と解すると、①「雀の子飼」、②「ちご遊ばする前わたる」、③「よきたき物たきてひとり臥したる」、④「唐鏡のすこし暗きを見たる」はどう考えればよいであろうか。

①と②について、「大系」の注には、①「雀の雛を飼育すること。その無邪気な様子に心がひかれるのである」、②「幼児を遊ばしている所を通り過ぎる時に心ときめきするのは、その天真爛漫さに心が奪われるからである」となっている。しかし、無邪気な様子に心がひかれるとか、天真爛漫さに心が奪われるというのは、「大系」のいう「何かを予想し期待する」という意味は、あまり出て来ない。むしろ「うつくしきもの」の中にはいるのではなからうか。「枕草子」一五一段に次のようにおる。

うつくしきもの、雀の子のねず鳴きするにをどり来る。二つ三つばかりなるちごの、いそぎはひ来る道に、いと小さき塵かほひのありけるを目ざとく見つけて、いとをかきしげなる指かほひにとらへて、大人などに見せたるいとうつくし。頭は尼そぎなるちごの、目に髪のおほへるをかきはやらで、うちかたぶきて物など見たるもううつくし。おほ

きにはあらぬ殿上董の、装束きうそくきたてられて歩くもうつくし。いみじう白く肥えたるちごの二つばかりなるが、二藍のうすものなど、衣ながにたすき結ひたるがはひ出でたるも、また短かき袖がちなる着て歩くもみなうつくし。八つ九つ十ばかりなどの男子の声はをさなげにてふみ読みたるみなうつくし。

(必要なところを抜き書きしてある。)

これらは、雀の子のかわいさ、子どもの天真爛漫なことを述べたのであるから、「心ときめきするもの」にあるそれと同一視するのは、どうであらうか。

①の「雀の子飼」は、その飼育している雀が生長したらどんなになるだろうと思つて心をおどらせながら飼つていと解するのがよいと思つて「源氏物語」の若紫の巻に、のちの紫上が雀を飼つており、それが逃げた時、女房が「いとほしうやうやうなりつるものを」と言つてゐるが、これも、雀がだんだん大きくなつて可愛くなつていくことを示してゐると思つて。

また②の「ちご遊ばする前わたる」の「ちご」は、これは、塩田氏が前書で「ちごが里人のあるいは下司のちごであつてはならない」と言われているがその通りだと思つて。

貴族(しかも上流の)の子どもが遊んでいるが、その前を通ると、ふと見上げた顔に「生ひ先見えて(=将来立派な地位につくだらうという)ことが予想されて」その期待に心

が動くという気持だと思つて。「わたる」を車に乗つて行くと解する説があるが、それは子どもを車に通ると危険でハラハラするといふ場合を考へてのことなので、ここでは、ただ廊下を通る、「枕草子」一段の「炭もてわたるもい」とつぎづきし」と同じように解してよい。

③の「よきたき物たきてひとり臥したる」は香りのよい部屋に、ひとり静かに身を横たえてゐると、何か夢見心地となつて、将来のことが思われるといふのであらう。

彼女がたき物を好んだことは、二〇一段に「心にくきもの」として「たき物の香、いと心にくし」とあり、次いで二〇二段で

五日の長雨のころ、上の御局の小戸の簾に斉信の中將のよりぬたまりし香はまことにをかしうもありしかな。

そのものの香ともおぼえず。(中略)またの日まで御簾にしみかへりたりしを、若き人などの世に知らず思へる、ことわりなりや

とあり、二二一段にも

よくたきしめたるたき物の、昨日、一昨日、今日などは忘れたるに、引きあげたるに、煙の残りたるは、ただいまの香よりもめでたし。

とるあの上によつてもわかる。

六

さて、④「唐鏡のすこし暗きを見たる」を除いた①⑦

は前述のように「心ときめきするもの」として理解できるのであるが、④はなぜ「心ときめきする」のか分かりにくい。

特に「暗き」について、いままでの説は大きく二つに分かれている。

(甲) 鏡の「曇り」とするもの。

(乙) 鏡に「陰翳」をおびたとするもの。

このうち(甲)とするのは、「心ときめく」を期待で心が動く状態としないで、単に心が動く、びっくりするということに解するところから出た意味であり多くの注釈書はこれをとっている。この、鏡の曇りでは、いままで説いて来た「心ときめきするもの」とはどうしても結びつかない。もつとも、「大系」のこの部分の補注で「私見(池田亀鑑氏)として、上等な鏡だというのに曇りが出ているのを見た時は、思わず苦情をいいたくなって自制できないとの解釈を提出したが」といわれているが、「梁塵秘抄」巻二の鏡曇りてはわが身こそやつれける わが身やつれては男退け引く(四〇九)

が、当時から流行っていた今様ならば、「胸つぶる(ドキソとする)こそすれ、期待をもって見るなどということがあるまい。

また、鏡に曇りが出ることは「曇る」というのが普通である。「日葡辞書」にも「カガミクモル」とあり、当時の

和歌の例だが、

曇りなき池の鏡によろづ代をすむべき影ぞしるく見えける(源氏・初音)

曇りなき鏡とみがく池の面に映れる影のはづかしきかな

(栄花・音楽・道長)

曇りなき鏡の光ますますに照らむ影にかくれざらめや

(今鏡・藤波下・能信)

ことはりや曇ればこそはます鏡映りし影も見えずなりにき(金葉・雑上・六一五)

これらの例や、前述のことから、「暗き」を鏡の曇りとみるのは無理である。

このような理由からか、林和比古氏は「暗き」を「蒼黒い深みのある趣き」ととられたという(佐伯梅友氏・石井茂氏「徒然草」△續文堂▽の注の引用による)。また池田亀鑑氏は「全講枕草子」の注や「大系」の補注で「陰翳」と述べられた。前引の「大系」の補注につづけて『くらき』を陰翳をおびた状態と解し、上等な鏡への心ときめきとすることもできるように思う。」といわれている。西下経一氏もこの説をとっておられる(「枕草子」△昇竜堂▽)。「陰翳」とは「大系」の注では「かげり」といい「岩波国語辞典」によれば「かげ、くもり。転じて変化があり深みのあること。」とあるから、林氏のいわれることも、これをさすと考えられる。「大系」の補注によれば、唐からの舶来の

鏡に、かげり（陰翳）がみえ、これからますます立派な鏡になって行くだろうと期待に胸がはずむのである、ということになる。

「唐鏡」について、塩田氏は「銀製か」（三巻本枕草子評釈）、小西甚一氏は「白銅製」（枕草子新釈）といわれているので、林氏の「蒼黒い」というのはどういふ状態かわかりにくい（青銅と考えられているのか）が、銀製または白銅製としたとき、「かげり」がでるのはやはり、古くなり曇ること、鏡としては適当なことではあるまい。しかし、深みのであるという方に重点をおいて考えた場合（われわれの言う年代がたつて、カンロクがでた）は、一応は「心ときめきするもの」として適当であるが、ではそれを果して「暗し」という語で表現するであろうか。

七

「暗し」を辞書でみると、たとえば「大日本国語辞典」では

- ① 光なし。明らかならず。やみなり。
- ② もりて判然とせず。
- ③ 事物を弁別する智に乏し。おろかなり。
- ④ 世間明ならず。文化開けず。人智蒙昧なり。
- ⑤ 国の光となるもの乏し。欠けたる処あり。不足なり。

とあり、他の辞書もだいたいこれと同じような意味を並べてある。「深みのあるかげり（陰翳）」のような高等な（？）意味はないようである。

「枕草子」で「暗し」という場合、ほとんどが、夜などの暗さに用いている。「落窪物語」「源氏物語」の例もすべてこれである。では「暗き見たる」を、「暗き所に見たる」とすると、「唐鏡を暗きに見たる」ならばよいが、「これでは適当でない。

しかし、三一段に次のような文がある。

（心ゆくもの）、神、寺などにまうでて物申さする（願イゴトヲ言ワセル）に、寺は法師、社は禰宜などの、くらからずさわやかに、思ふ程にもすぎてとどこほらず聞きよう申したる。

法師や禰宜が、自分が思っていた以上に、すらすらとよどみなく願いごとを申し述べるといふのである。この「くらからず」は知らないことがないの意味である。すなわち、この「暗し」は前記、「大日本国語辞典」の③に相当する。そして、当時は

山を出でてくらき道にぞたどりこしいま一度の逢ふことにより（和泉式部日記）

日の光月の影とぞ照らしけるくらき心の闇はれよとて（千載・釈教・一二四二）

のように、宗教（仏教）的に用いられているが、これらもやはり、仏教的に、何もわからない、知らないという意味であろう。似たような語としては「暗す」がある。

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは今宵さだめ

よ（伊勢・六九段）

いにしへを恋ふる涙にくらされておぼろに見ゆる秋の夜の月（詞花・雜下・三八九）

朔日の日の夕さりぞ参りつきて、陣入るるより昔思ひ出でられて、かきぞくらざる。〔讀岐典侍日記・朔日の出仕）

これらも、悲しみに心が曇ると解されているが、結局、悲しみのために何が何んだかわからなくなるということで、「暗し」「暗す」には、わからない、知らない、という意味がある。

一方漢文では「悻」「晦」等を用いて「クラシ」（類聚義抄）とよんで、同じくわからないの意としている。

「皆悻於放」（戦国策秦）

「風之晦跡、和而不同」（紀時文・風中琴賦）

私は、「唐の鏡すこし暗き見たる」の「暗し」をこのような用例などから知らない、わからないの意に解したい。

そして解釈は、「唐から来た鏡で、私のあまり知らないの（鏡）を見た時（こと）」となる。よい品、特に舶来品などで、自分が知らないものを見た時、これはどんな品だろう、どのくらいの価値があるのだろうか、その品の価値の高いことを期待しながら見ることは、現在でも多くあることである。ましてや、現在より舶来品の少ない、しかもそのような品など実際には手にはいることが少なかったであ

の女にとつては、見なれない品を見た時、それこそ「心ときめき」させたと思像することはそう無理ではないと思う。

特に、彼女が中国のものに心を寄せていたことは、紫式部から「清少納言こそ、したり顔にのみじう侍りける人。さばかりさかしたち、真字書きちらして侍るほども、よく見れば、まだいとたへぬこと多かり」（紫式部日記）と評されながらも、「枕草子」の中に白氏文集をはじめ七つの漢籍を二十カ所に、また日本の漢文書を一六カ所に引用していることでもわかる。

だから、それら（中国風のもの）が、古くなりそこなわれると感じが悪くなり、捨てたくなるのであろう。

昔おぼえて（昔ノ立派サガ思イ出サレテ）不用なるもの（中略）唐絵の屏風の黒み、表そこなはれたる。（枕

草子・一六三段）

これからみても、たとえ陰翳がでてカンロクがついたとしても、唐鏡が古くなって行くのに、清少納言か「心ときめき」したとは思われないのである。